



JSSH NEWS

日手会ニュース

発行：一般社団法人日本手外科学会
広報・渉外委員会

日本手外科学会 理事長に就任して

理事長 平田 仁

目 次

- 理事長に就任して
- 前理事長のご挨拶
- 副理事長に就任して
- 理事に就任して
- 新名誉会員のご挨拶
- 新特別会員のご挨拶
- 2020年度 各委員会委員
- 監事紹介
- 物故名誉会員への追悼文
故 三浦隆行先生を偲んで
故 平澤泰介先生を偲んで
故 原徹也先生を偲んで
- 教育研修会のお知らせ
- 関連学会・研究会のお知らせ
- 編集後記

ピンチをチャンスに



本年度より2年間日本手外科学会の理事長を務めさせていただくことになりました。大変光栄なことと存ずるとともに、私を今まで育てていただいた日本手外科学会とその会員の皆様のご恩に報いるべく全身全霊を捧げて学会の発展に貢献する所存です。会員の皆様にはご指導・ご鞭撻を何卒よろしくお願いいたします。

猛威を振るうコロナ禍の中で令和2年度の日本手外科学会は異例づくめの船出となりました。本来は鼻風邪程度を起こす弱毒なコロナウイルスですが、中国武漢市の市場で発生した変異株は一部の人に対して補体・凝固線溶調節、炎症の調整などに関連する遺伝子群に影響して血栓・塞栓症を引き起こし、また、免疫系を暴走させて深刻な急性呼吸促迫症候群を引き起こし、感染者の5-10%を死に至らしめる強毒ウイルスに変貌しました。感染成立後の無症候期に感染力が最も高まり、このステルスキャリアーにより引き起こされるクラスターの制御が困難を極め、また、一旦重症化すると長期間のICU管理を要するため、容易に医療を逼迫させ、通常診療の実施を実に困難にしています。このため、日本手外科学会会員の多くが現在でも手外科診療の実践に深刻な影響を受けていることと存じます。パンデミックが本格化したのは今年に入ってからであり、本邦では2月初旬にダイヤモンドプリンセス号で700名を超える大規模クラスター

の発生が大きく報じられ、一気に緊張が高まりました。しかし、実際には第1波の規模が諸外国と比較してかなり小さかったこともあり、日本人はファクターXに守られているとの都市伝説にも近い楽観論も囁かれていました。そんな中で日本手外科学会理事会では加藤理事長の指導のもとで冷静に事態が分析され、坪川第63回学術集会会長に対してオンライン学会での開催を進言しています。これに対して、坪川会長も大胆かつ機敏に行動を起こし、短期間にオンライン学会への切り替えを進めていただきました。楽観論に後押しされて開催時期の変更による通常開催を目指す学会が多くを占めた中での英断でしたが、5月25日の緊急事態宣言解除後に短期間で第1波を超える規模で第2波が到来し、判断を誤った多くの学会が大混乱に陥るのを尻目に6月25日から8月17日まで大きな混乱もなく成功裏にオンライン学会を開催できました。これも直前での変更も寛容に受け入れ、何事にも前向きにご対応いただける民度の高い手外科学会会員の皆様あっての成果と心より嬉しく思い、感謝申し上げる次第です。

会員の皆様がオンライン学会を楽しまれる背後で、今期理事会はコロナ禍により生じた逆境を千載一遇の機会と捉えて、ポストコロナでの発展につなげるための大胆な改革を進めていますので、ここに多少紹介をさせていただきます。日本手外科学会はサブスペシャリティ分野としては外科系領域で最も早く専門医制度を構想し、厚生労働省、日本医学会、旧専門医機構との交渉を重ね、早くも2009年には学会主導で専門医制度を発足させています。以来これまでに12回の試験を実施し、1023名の手外科専門医を認定してきました。これは専門医制度を礎とする効率的で合理的な医療の再構築を目指した当時の厚生労働省の方針に応じた動きでした。その後専門医制度に対する国の方針が二転三転し、一向に定まらない中でも厚生労働省や専門医認定機構の求めに応じて愚直に専門医制度を整備し、親学会である整形外科学会、形成外科学会との調整を繰り返し、制度の維持・改善に努めてきました。しかし、現状では専門医制度の対象は基盤診療科に留まり、未だにサブスペシャリティーを対象とする専門医制度の形は見えてきません。一方で、国内事情への対応や外形の維持に注力するあまり国際交流や革新的な研究の推進など従来日本手外科学会が強みとしてきた部分での活力が鈍り、嘗ての輝きはすっかり失われてしまいました。このため昨今では理事会に対してこの事態への対応を望む声が多く寄せられていました。このような状況に鑑み、昨年末より加藤前理事長と私、山本真一財務委員長の3名で学会の抱える問題点を洗い出し、今期に抜本的な改革を断行するための委員会改変を推進してきました。この過程で専門医関係の委員会に関しては統廃合と合理化を進め、人材を学術活動の推進と、国際交流に厚く登用できる仕組みに変更しています。その上で、新規理事会立ち上げ直後から2カ年計画での学会改革を推進しています。初年度に最も力を入れているのは専門医制度とリンクする形で学術活動を推進する仕組みの構築です。現状の手外科専門医制度では専門医試験問題の根拠となる情報が構築されておらず、EBMの観点から大変脆弱なものとなっています。残念ながら、日本手外科学会の発表演題も小規模の病院コホートに基づくケースシリーズや症例報告が大半を占め、EBM構築の基盤となる手外科に関わる大規模臨床研究を推進する仕組みが整っていません。能力とやる気のある若手学会員は数多いですが、これでは彼らも国際的に評価される業績を積み上げていくことができません。これらを一気に改善する方策を専門医試験委員会担当の西田理事、教育研修・オンラインマガジン運用委員会の村瀬理事、編集

委員会の面川理事と繰り返しTV会議を開催して慎重に検討してきました。その結果、学会の若手を中心に組織横断的に有能な人材を登用し、オンラインマガジン上に最新の学術情報を集めた論文レビューコーナーを運用させ、会員に途切れなく専門医試験の根拠となる高質な情報を提供させ、さらにこれらの若手による国際雑誌へのシステムティックレビューの投稿や多施設共同研究の実施を後押しすることとしました。従来対面で開催してきた春期・秋季教育講演も今後は全てオンデマンド配信として学会員全員が視聴可能なものへと変更をし、講演で提供される情報の質の担保に関しては教育研修委員会が責任を持つ仕組みに変更しました。さらに、日本手外科学会誌に関しては、学会発表論文の審査基準を見直し、会員の研究推進・論文作成能力を高めるとともに、委員会が選定する当該分野の第一人者に総説論文の執筆を依頼し、ここで発信される情報の質に関しても編集委員会が責任を持つ仕組みといたしました。今後はこれらを通じて発信される情報を根拠に専門医試験を出題していくこととし、さらに、若手の育成を強力に推進してまいります。その他にも、今回のような不足の大規模災害に対応するための緊急事態対応委員会の新設、国際交流の活性化や女性会員の登用、手外科広報活動の推進、専門医像の再検討など様々な改革が頻繁なTV会議を通じて今までにないスピード感で推進されています。紙面の関係でこの記事にそれらの詳細を紹介できませんが、今後機会を捉えて担当理事と連名で皆さんにご報告したいと思います。従来のように対面での密度の高い協議ができない中でも理事会・委員会ではTV会議やメール審議などオンラインの仕組みをフル活用してピンチをチャンスに変えるべく、果敢な挑戦が続いています。会員の皆様には、忌憚なくご意見・ご要望をお寄せいただき、さらに、可能であれば改革にも直接ご加担いただきたいと思います。

前理事長のご挨拶

前理事長 加藤 博之

(信州大学医学部附属病院・流山中央病院)



2018年4月より日本手外科学会(日手会)理事長を2年間務めさせていただきました。日手会員の皆様には、温かいご支援とご協力を賜り、心よりお礼申し上げます。また理事会メンバーの方には、それぞれの委員会でのご活動を通じ、私からの突然の無理難題やご相談にお応えいただき、大変に助かりました。ありがとうございます。私の在任2年間における理事会の取組、成果、そして今後の課題について、項目別に述べさせていただきます。

1) 事務局移転：新理事会発足早々、コングレより日手会事務局業務から撤退の意向があった。慰留に手を尽くしたが叶わず、2020年度よりアイ・エス・エスに事務局を移転している。今後の安定した事務局継続には業務簡素化が必須である。

2) 日手会の国際的プレゼンスの回復と向上：2018年度の理事会において、国際手外科学会連合(IFSSH)日本支部とアジア手外科学会連合(APFSSH)日本支部の活動を日手会の国際活動の一環として行うことを確認した。その後2019年4月の総会において、両連合日本支部を日手会内に統合し、両連合のナショナルデレゲート選出に関する規定を日手会内に設置することを、承認いただいた。さらに、2020年度より、両連合日本支部の会費を日手会会費内に組み込み、日手会専門医を有する会員にはこれらを同一口座に支払うようお願いすることにした。2019年6月にベルリンでIFSSHの新officerの選挙があった。残念ながら日手会から新officerに人員を送り込むことはできなかった。IFSSHのofficer 7人のうち、アジアからは新officerにJin Bo Tang (中国)が選ばれ、それ以外にGoo Hyun Baek (韓国)が留任している。IFSSHやAPFSSHにおける日手会のプレゼンスは低落していることを痛感した。今後は、日手会員発の画期的な治療法開発と優れた研究に加え、Travelling fellow制度の充実、国際雑誌や国際学会での発表、国際交流、学会ホームページの英語版の充実、などを通じて日手会の国際的プレゼンスの回復が重要な課題である。

3) 女性手外科医、地方在住手外科医の支援：矢島前理事長時に発足した女性医師ワーキンググループ(WG)に、手外科専門医偏在対策WGを合わせて2018年度からキャリアアップ委員会の名称で臨時委員会とし発足し、2020年度より常設委員会とした。

4) 手外科の国民への認知度向上：2019年4月の総会において「手の日」制定に関して代議員に説明し、その後「手の日」案を会員から募った。その結果、英語で手は「HAND(ハンド)」なので「ハ(8)ンド(10)」と読む語呂合わせから8月10日を「手の日」として申請し、2019年8月に日本記念日協会から認定された。「手の日」を通じて健康な手を持っていることへの感謝、手の不自由な人々に対する社会的な

関心、手の怪我・病氣・しびれなどの改善に従事している手外科の存在を知ってもらうことが目的である。広報渉外委員会による一般国民に手外科認知度を調査結果では、手外科専門医の認知度は理事会の予想を大きく下回るものであった。手外科と手外科専門医の存在を広く国民に認知してもらう啓蒙活動も今後の課題である。

5) **会員管理システムのオンライン化**：情報システムワーキンググループを設置し、KCSと会員管理システムの1st phaseに関する打ち合わせを促進し、契約を完了した。これにより会員管理業務の迅速化、経費削減に見通しをつけた。次期理事会には、会員管理システムの2nd phaseとして、手外科専門医の申請、登録、単位取得業務のオンライン化に道筋をつけていただきたい。

6) **委員会業務のスリム化**：財政の健全化、事務局業務の縮小、重点的な委員会活動などの観点から、各種委員会のオンライン開催を励行した。さらに、教育研修委員会とオンラインジャーナル別冊委員会、編集委員会と用語委員会、社会保険委員会と医療機器管理委員会、専門医資格認定委員会と施設認定委員会を、それぞれ統合した。

7) **第63回日本手外科学会学術集会オンライン化、2020年度総会のweb会議開催、日米手外科会議開催延期**：2020年2月にCOVID-19感染が拡大し、同年3月はこれらの対応に追われた。坪川直人学術集会会長、平田仁副理事長のご尽力でなんとか乗り切ることが出来、素晴らしい学術集会が開催されている。日米手外科会議は、2019年度より組織委員会発足、事務局選定、趣意書作成、資金集めと徐々に加速した時点での開催延期となった。災害、感染症など時代に即した柔軟な学会運営、学術集会開催が今後の課題である。

副理事長に就任して

北海道大学大学院医学研究院整形外科学教室 岩崎 倫政

(緊急事態対応委員会、財務委員会担当)



このたび理事長の平田仁先生をはじめとする理事の皆様よりご推挙いただき、副理事長を拝命いたしました。このような大役を仰せつかり身の引き締まる思いですが、与えられた使命を全うすべく、全力を尽くす所存でございます。

現在、新型コロナウイルス感染症収束の兆しが見えない状況で、日本手外科学会(以下、日手会)の運営は厳しい状況に置かれています。平田理事長をサポートしつつ、会員の皆様と協力し、この難局を乗り切っていきたいと考えています。その中でも、特に以下の点に力を注いでいく所存であります。

1) 緊急事態対応委員会担当理事として

この10年間に、2回の学術集会在開催形態の変更を余儀なくされました。今後も、パンデミックや近年頻発する自然災害などによる学術集会在各種イベントの開催形態の変更や中止の可能性を念頭に置く必要があります。このような突発的な事態に対応するために、平田理事長のご提案で各委員会の枠組みを超えて、迅速な対応・判断を行う目的で本委員会が新たに設立されました。このような重要な使命を帯びた委員会の担当理事に指名され、身が引き締まる思いであります。委員会の皆様と協力しつつ、現在の難局を乗り切っていきたいと思ひます。

2) 財務委員会担当理事として

学会の健全な運営には、安定的な財政基盤の構築が不可欠であります。したがって、本学会がさらに発展するには、この基盤強化を図る必要があります。会員の皆様に負担や不便さを感じさせることなく、いかに収入を増やし、支出を抑制していくかを委員の皆様と考えていきたいと思ひます。

3) 日手会のプレゼンスの向上

国内外での本学会のプレゼンスの向上に関して、近道はないと思ひます。若手や中堅の手外科医に活躍の機会を提供し、彼らにより学術的成果を国内外に発信し続けることが真のプレゼンス向上に繋がります。学術集会在等で会員の学術的モチベーションを向上させ、活躍の場を与えるような企画を学会長や会員の皆様と立案・実行していければと思ひます。

これからの数年間、本学会はこの未曾有のパンデミックに対する対応を迫られると思ひます。しかし、緊急的対応に終始するのではなくウィズ or ポストコロナ時代(New Normalと呼ばれる時代)にもしっかりと対応できる学会運営システムを構築していくことが不可欠であると思ひます。甚だ微力ではございますが、これを肝に銘じて誠心誠意努力していく所存でございます。今後とも、これまで以上に、何卒よろしくお願ひ申し上げます。これをもちまして副理事長就任のご挨拶に代えさせていただきます。



この度、令和2年度日本手外科学会副理事に就任しました、金沢医科大学形成外科、島田賢一と申します。どうぞよろしくお願ひ致します。日本手外科学会の皆様にご挨拶を申し上げます。私は、昭和63年に富山医科薬科大学医学部を卒業し、金沢医科大学形成外科学教室に入局しました。その後、砺波市立病院形成外科、石川県立中央病院形成外科などの関連施設に赴任、帰局後平成22年に准教授、平成28年から主任教授に就任しました。現在、手外科はいうまでもなく乳房再建、マイクロサージャリーを用いた組織移植、創傷治癒を専門に北陸で診療、研究に従事しています。

私の手外科との出会いは、入局して間もない頃に当時の手の外科学会に先輩の先生に連れて行っていただいたことでした。手という極度に機能化された局所における、さまざまな疾患とその治療に対してとても興味をそそられました。そして、学会での熱いディスカッションをしている諸先生の姿がとても新鮮でインパクトを受けました。また、若い形成外科医にとっては、はじめに遭遇する局所のひとつが手の疾患が多かったこともあり、その後常に自分の中で大きな部分を占めていました。そしてもう一つマイクロサージャリーとの出会いがあり、遊離組織移植にのめり込んでいきました。やがて、その二つが結びついた形で自分の専門分野となりました。

平成30年度にはじめて、理事に就任させていただきました。そして、今回2期目の理事ですが多くの先輩理事がいらっしゃるなか、副理事を拝命いたしました。身の引き締まる思いです。引き続き、形成外科医として手外科学会に貢献したいと思います。どうぞ宜しくお願ひ致します。

前回、理事就任時に二つの目標を掲げました。それは、一つは、整形外科と形成外科の垣根をとりはらい、協力しながらよりよい手外科医の育成を図る。もう一つは地方における手外科の啓蒙、啓発です。前理事会(加藤理事長)においては、キャリアアップ委員会の中に過疎地域・女性医師問題対策担当が設けられ、地方での手外科の啓蒙、啓発によく着手された状況です、まだ道半ばであり今後もさらなる対応が必要と考えます。前者についてはまだまだ十分な体制が整っていません。個人的にはまずは、形成外科若手医師の手外科学会への入会の促進が必要と考えます。それには形成外科医であっても手外科専門医を取得することが十分可能であることを啓発していく必要があると思います。当医局では、私が理事に就任して以降、若い医局員が複数手外科に入会してくれています(決して強制はしていません)。形成外科の代議員の先生方には是非、若手形成外科医を手外科へ誘っていただきたいと思います。

今回、コロナ渦という困難な状況下で、平田理事長体制の理事会活動が始まりました。平田会長の掲げる手外科学会の改革は国際化、学術研究活動、学術集会運営、学会誌、専門医制度、経費削減など多岐にわたります。コロナ渦のこの現状だからこそドラスティックに変革が可能な分野もあると思われれます。副理事として全力でサポートし、よりよい日本手外科学会となるよう尽力したいと思ひます。どうぞよろしくお願ひ致します。

理事に就任して

岡谷市民病院整形外科 内山 茂 晴

(カリキュラム委員会、定款等検討委員会担当)



今年度から理事を拝命しました岡谷市民病院の内山茂晴でございます。

日本手外科学会には1986年に入会しましたので今年で34年にもなります。私が医師免許取得したのは1985年ですから手外科学会はまさに私の医師人生と共にあったわけです。その間手外科の進歩を目の当たりにしてきました。手外科が最も熱い時代だったのではないかと今思うのです。

時代の変化と共に手外科に求められているのは何か？特にコロナ禍における手外科診療はどうなっていくのか。連日新型コロナウイルスのニュースが席卷し、かつての日常診療は失われつつある。治療薬とワクチンができるまではこの状況が劇的に改善することはないだろう。私の勤務する地域でも現時点で市中感染の様相を呈してきた。4月、5月には手根管症候群などの生命に影響を及ぼさない不急の手術は延期するよう“新型コロナウイルス陽性および疑い患者に対する外科手術に関する提言(改訂版)”があり、手外科手術の主要疾患が一番に名指しされ、患者も感染を怖がって手術をキャンセルしたことがあった。しかしながらこのような状況においても痛みや不便さを取り除くことを希望する患者はおり、結局当院では手外科の待機手術はほとんど通常通りに行ってきた。手外科の需要は決して少なくないことを実感した。7月25日現在、フェーズが変わり首都圏を中心に地方へと感染拡大が顕著になってきておりその勢いを制御するのは不可能といわれている。市中感染が広がりWHOが空気感染の可能性を示唆している中、全身麻酔あるいは区域麻酔で行う通常の手外科手術をどの時点で中止すべきなのか、COVID-19感染あるいは疑いのある患者における緊急手術適応、陰圧手術室のない病院での対応、陽圧室を使用せざるを得ない場合の対応、手洗いなどの手指衛生の重要性が叫ばれている今、鏡視下手術がより望ましいのか、手外科手術患者はPCR検査や胸部CTを撮影すべきなのか、などコロナ禍においてわれわれ外科系医師が考えるべきことは多い。

今回カリキュラム委員会と定款等検討委員会の担当理事を仰せつかりました。コロナ禍で委員会での対応を早急にしなければならない案件も山積しております。今後とも、会員の皆様のご支援とご協力を頂戴しながら、手外科学会の発展のために励んでいく所存です。何卒、宜しく願い申し上げます。



今回2期目の理事を務めます、大江隆史です。

2年前の理事就任時の抱負、その後の実績、今回の立候補時の抱負、現在の想いの順で述べたいと思います。

1) 2018年の抱負

今回、手外科の学問的業績の乏しい私が理事に推挙された要因は、ロコモのPRに関する業績が評価されたものと考えています。手外科学会で財務委員長などを務めた経験から、専門的で極めて誠実な団体である手外科学会は社会や医学界へのPRには長けていなかったのではないかと感じています。手外科は同じ基盤専門医の上位に位置する心臓血管外科と同程度の認知を得ているとは思えません。手外科のPRなしに社会や医学界での認知や地位の向上は困難です。ロコモでの経験を手外科でも生かしたいと思います。

2) 1期目の実績

初めて全国規模での手外科の認知度調査の設計を広報・渉外委員として行いました。その詳細について、本来であれば2020年の学術集会で報告させていただくことになっていましたが、新型コロナの影響でかなわなかったことは残念です。また講演会など不可能となったこともあり、手外科のPR事業も実現しませんでした。

社会保険委員会の担当理事としては、亀山・光安委員長の仕事が円滑に進むように補佐しました。2020年度の診療報酬改定での手外科領域の増収予測額は16億円となり、この点は自負しております。

3) 今回立候補時の抱負

今、手外科は臨床医学・医療の分野で、かつてない存続の危機にあると考えています。特に、7対1看護基準を有する大規模病院では、危機の度合いが顕著です。手外科の手術の多くは診療報酬が2万点未満で、それが全身麻酔で行われない場合は、看護重症度のC基準に当てはまらず、病院全体の重症度を低下させるものとして扱われます。また、新興の肩関節外科に比べて手外科は専門性の高さが診療報酬に反映されていません。立候補に当たり、社会保険委員会担当理事としての2年間の実績をさらに積み上げ、手外科の専門性を診療報酬に反映させるべく努力する事を約束いたします。また、手外科の一般の認知度を向上させ、手外科が臨床医学・医療にとって欠くべからざる専門分野であることをPRすることによって、手外科存続の危機に立ち向かいたいと思います。

4) 2020年7月時点の想い

今回の新体制で1理事が1委員会を担当する改革が行われ、社会保険委員会を担当することになりました。2022年度診療報酬改定時に新たな成果を得られるように努力します。



この度、日本手外科学会理事を拝命いたしました奈良県立医科大学、手の外科学講座の面川庄平です。日本手外科学会会員の皆様にご挨拶を申し上げます。

私は2年前に本学会の理事を拝命し、この度の再任で2期目を迎えます。理事会では、引き続き編集委員会を担当させていただきます。用語委員会は、2020年4月に編集委員会と統合されました。整形外科学用語集との整合性確認を完了しましたので、学会サイトの会員専用ページで手外科用語集改訂第5版の修正版が閲覧できます。

これからの2年間、1期目での経験を糧にして全力で取り組む所存です。これまでの編集委員会での仕事を通じて、手外科学会雑誌の課題が少しずつみえてきましたので、より会員の皆様役に立つ雑誌を編集するために努力いたします。

日手会雑誌にオンラインジャーナルが導入されて4年目になります。しかしながら、オンライン化されて却って雑誌を読まなくなったという声も聞かれます。また、論文の内容が症例コホート (Case series) の掲載に傾斜しすぎているという指摘もあります。投稿される論文には、洗練された質の高い論文がある一方で、投稿規定に沿っていない問題のある論文も含まれています。今後、会員教育や会員間の情報共有に寄与するために、総説 (Review article) の掲載を追加し、原著論文の採用率をより厳格にするようにいたします。池口良輔委員長、河村健二アドバイザーをはじめとする編集委員の先生方と協力して、円滑な審査を行い良質なジャーナルの発刊を継続していきたいと存じます。代議員の先生方には、査読業務に関してご協力のほど、よろしくお願い申し上げます。

2020年度の学術集会発表論文の受付期間は、第63回学術集会のオンライン開催期間と同じ、2020年6月25日から8月17日までとします。オンライン学会での質問内容を論文に盛り込んで投稿をお願いいたします。締め切り以降に投稿された論文は自由投稿論文として受理されます。

また、日本手外科学会創立60周年を記念して創設された日本手外科学会奨励賞(田島達也賞・津下健哉賞)の審査は、編集委員会の重要な業務の一つです。今年は第4回となりますが、9月1日から10月1日まで募集を予定しています。45歳以下の日本手外科学会正会員である若手研究者には、学術集会発表論文に奮って投稿いただくようお願いいたします。

平田仁理事長のもと、理事、代議員の方々とともに、これまで先輩方の築かれた日本手外科学会のさらなる発展に尽力する所存です。会員の皆様には、今後とも一層のご指導ご支援のほど、よろしくお願い申し上げます。

福岡山王病院整形外科 副島 修

(キャリアアップ委員会、手外科専門医検討委員会担当)



この度、伝統ある日本手外科学会理事を拝命しました福岡山王病院整形外科の副島 修です。紙上をお借りして、僭越ではありますが自己紹介と抱負を述べさせていただきます。

私は、1986年に福岡大学医学部を卒業後に高岸直人教授が主催されていた整形外科教室へ入局し、1988年に大学院へ進学して1992年に末梢神経での神経調節作用の基礎研究で学位を取得しました。その後に着任された緒方公介教授よりUCSF手外科研究所への留学を勧められ、1993年より1995年まで上原記念財団ポスドクトラルフェローとしてEdward Diao教授の下で屈筋腱縫合の力学的解析や舟状骨の3次元形態解析などの研究に従事し、手外科医の一步を踏み出しました。1995年の帰学からは助手、講師、准教授に任命され、内藤正俊教授の下で臨床、研究、教育の責任者として手外科一筋に邁進してまいりました。そして、2009年の福岡山王病院開院を機に整形外科部長、国際医療福祉大学教授、福岡大学整形外科臨床教授として赴任し、現在に至っております。

日本手外科学会での活動としては、2006年に評議員に選出され同年より広報委員会委員(2008年-2010年委員長)、2010年からは国際委員会委員(2012年-2014年委員長、2014年-2015年アドバイザー)、2011年Hand Surgery編集委員会委員、2016年からは施設認定委員会委員(2018年-2020年委員長)を拝命し活動してまいりました。また、前述のUCSF手外科研究所への留学に加えて、2000年度JSSH-HKSSH traveling fellow、2006年度JOA-AOA traveling fellowに選出され香港、米国を訪問し手外科診療の視察と研究講演を行う機会にも恵まれました。さらに韓国慶北大学、タイ国Mahidol大学、米国Stanford大学をvisiting professorとして訪問して、より一層の研鑽を積むと共に手外科の啓蒙と技術指導を行い、多くの国の手外科医との親交も深めてまいりました。

手外科診療の社会的ニーズは依然大きなものがありますので、日本手外科学会の活動と手外科専門医の存在をさらに社会にアピールし、手外科学の重要性・面白さをこれまで以上に若手医師や医学生に認識させる必要があります。今回、キャリアアップ委員会と手外科専門医検討委員会の担当を平田 仁理事長より仰せつかりましたので、これまでの委員会活動や海外での貴重な経験を踏まえて、手外科の地位のさらなる向上を目指して本学会の発展のために微力を尽くす所存です。どうぞ宜しくお願い致します。



Covid-19の全世界的な蔓延により第63回日本手外科学会がWebinar開催となり、また、FESSH(ヨーロッパ手外科学会)やASSH(アメリカ手外科学会)のWebinar開催が決定しています。学会に参加できない、飛行機に乗れない状態が続いています。その中で2期目の理事として平田理事長から国際委員会担当事務を拝命いたしました。本委員会の主な事業としては日本からの日米、日韓、日台、日香travelling fellowの選考や派遣、海外からのtravelling fellowの受け入れと国内施設の紹介、案内、IFSSH(国際手外科連合)やAPFSSH(アジア太平洋手外科連合)へのdelegateの派遣、日米手外科学会(2022年または2023年へ延期)についての米国との連絡、連携などが中心となります。さらに国際委員会としてどのような活動をすれば、日本手外科学会の国際的プレゼンスを高めることができるのかを検討しています。

2025年のIFSSH開催国に米国ワシントン DC(米国としては2回目)が決まりましたが、2028年はアジア開催となることが決まっています。これまでは1度IFSSHを開催した国に2度目が回ることはなかったのですが、米国が2回目を開催することから、日本手外科学会として1986年東京以来の日本開催を模索しています。2022年のロンドンで開催国が決定される予定です。みなさまにはさまざまな働きかけをお知り合いの各国delegateにお願いできれば幸いです。

今年度はCovid-19の蔓延により、残念ながらASSH travelling fellowの受け入れ、派遣が中止となりました。これは本年度のfellowを来年に延期派遣する予定であることが理事会決定しています。このことにより、来年度の応募を希望する若手の先生方の不利益にならないように配慮していくよう、委員会で検討していく予定です。

困難な時期ですが、この難局を切り抜けられるように理事として力一杯働いていく所存です。よろしくお願ひいたします。



私は1991年に岡山大学医学部を卒業後、岡山大学整形外科に入局いたしました。岡山済生会病院で赤堀治先生のもとで修行された橋詰博行先生(笠岡第一病院)が帰局されたばかりであり、大学院時代から外傷、末梢神経障害、先天異常、マイクロサージェリーをはじめとした手の外科のご指導をいただきました。1997年に留学から帰国した後は、リウマチ診療と同時に上肢班のスタッフとして鏡視下TFCC修復や、手根管開放術、烏口肩峰靭帯切離術のお手伝いをさせていただきました。2005年以降は上肢班とリウマチ関節班の責任者となりましたが、津下健哉先生(広島大学名誉教授)がはじめられた岡山大学手の外科班を受け持つにはあまりにも経験が少なく、先天異常の難しい症例に出会ったときには、高山真一郎先生(国立成育医療研究センター)に何度も教を請いました。リウマチ手の外科の分野では南川義隆先生(南川整形外科・Namba Hand Center)には直接手術を見学させていただく機会をいただき、水関隆也先生(広島県立障害者リハビリセンター)、石川肇先生(新潟県立リウマチセンター)にはヨーロッパのリウマチ外科医との交流でお世話になりました。また現在石川先生が代表世話人を務められるリウマチ手の外科研究会では政田和洋先生(政田整形外科・リウマチ科)、加藤博之前理事長はじめ世話人の先生方にもいろいろとご指導いただきました。現在は関節リウマチ・変形性関節症の肩・肘、手関節、手指の機能障害・変形に対する人工関節置換術や関節形成術を中心に診療を行っています。

これまで日本手外科学会においては、雑誌編集委員、Hand Now junior editorを拝命して参りましたが、この度、平田理事長から専門医制度委員会、専門医試験委員会の担当理事を仰せつかりました。専門医試験委員会の委員長は稲垣克記先生(昭和大学)に、アドバイザーとして前委員長の田中克己先生(長崎大学)にご就任をお願いしました。つい最近サブスペシャルティ細則が日本専門医機構のHP上に公開されました。今後本学会にも要求されることを想定して即時対応できるよう、これまで構築していただいた専門医制度整備基準案を委員の先生方と一緒にさらに充実させて参ります。

専門医試験委員会の委員長は山崎宏先生(相澤病院)、アドバイザーは長尾聡哉先生(板橋医師会病院・日本大学)をお願いいたしました。HPでお知らせしましたように、コロナウイルス感染症拡大の影響で、第13回専門医試験が延期せざるを得ない状況になりました。私は村瀬剛理事(大阪大学)の教育研修・オンラインジャーナル別冊運用委員会(現 教育研修・オンラインマガジン運用委員会)、情報システム委員会の委員も兼任させていただいておりますので、連携を取りながら、委員の先生方と、過去問の公開に向けた検討やエビデンスに基づいた新作問題の作成を行って参ります。

最後になりましたが、ご推薦いただきました砂川融前理事(広島大学)、建部将広先生(名古屋大学)をはじめ関係各位、このような機会を与えてくださいました会員の皆様に御礼申し上げます。微力ではございますが、日本手外科学会の発展に全力を尽くす所存ですので、ご指導・ご鞭撻のほど、何卒よろしくお願い申し上げます。

埼玉慈恵病院 埼玉手外科マイクロサージャリー研究所 **福本 恵三**
(先天異常委員会、倫理利益相反委員会担当)



この度理事に就任させていただきましたことを皆様にご挨拶申し上げます。

私は1986年に手外科医を志し、東京慈恵会医科大学で形成外科の研修を始めました。実習で丸毛英二先生の人柄と手外科手術に触れ、とても魅力を感じたためです。すぐに日本手の外科学会に入会しました。初めて購入した書籍は上羽先生の「手 その機能と解剖」とGreenの「Operative Hand Surgery」(第1版でした)であり、購読を始めたのはJournal of Hand SurgeryとJournal of Plastic and Reconstructive Surgeryです。学会に入会して日本の手外科は整形外科医がほとんどであることを知りました。形成外科医は日本の手外科ではマイノリティーですが、マイノリティーゆえの価値もありましょう。現在私の患者さんは99%が手外科疾患です。手外科を専門とする珍しい形成外科医として日本手外科学会・日本形成外科学会の発展のための一助になりたいと思っています。

担当させていただくのは先天異常委員会と倫理利益相反委員会です。

入会10年後、評議員に選任されてすぐ委員にいただいたのが先天異常委員会でした。堀井恵美子先生から学会場で「先生、先天異常委員になってもらいますよ」とお声をかけられ、驚くとともに嬉しかったのを覚えています。委員会では荻野利彦先生、堀井恵美子先生、高山真一郎先生、川端秀彦先生などの方々とディスカッションし、勉強させていただきました。当時作成した母指多指症術後評価法はJSSH Thumb Polydactyly Postoperative Evaluationとして国際的に高い評価を得ています。先天異常委員会では先天異常懇話会、学会ホームページの先天異常相談窓口を通じて、会員の皆様への情報提供、アドバイスを行なっています。また、治療に即した母指多指症の分類法の作成などに取り組んでいます。今年度は素晴らしい先生方を委員に迎えることが出来ました。世界に向けて新しい情報を発信していきたいと思っています。

倫理利益相反委員会は学会の規範を守るため重要な機関です。日本手外科学会のCOIに関する指針等を作成したときは委員長で、病気入院中の病室で原案を作成したことを思い出します。日本医学会はCOIガイドライン改定を検討しており、各学会組織としてのCOIが加わろうとしています。動向に注意し、外部委員の先生方のご協力を得て適切に対応してまいります。

新型コロナによって、第63回学術集会はweb開催となりました。直接皆様と交流できないことは大変残念ではありますが、逆にweb開催の良いところも見えて来ました。今後世界は一気に変革していきます。学会のあり方も同時に変わらなければなりません。日本手外科学会は平田理事長の強力な指導のもと、この機会に大きな改革を行おうとしています。私もそのために尽力する所存です。

私の医師としての人生は手外科学会とともにありました。私を成長させてくれた学会のために働かせていただけることを嬉しく思っています。

どうぞよろしくご挨拶申し上げます。



理事を拝命しました、愛知医科大学形成外科の古川洋志と申します。ご存じない方が多いと思いますので自己紹介させていただきます。私は京都市出身で、1991年に北海道大学を卒業し、すぐに北海道大学形成外科教室に入局しました。当時の花形はマイクロサージャリーを用いた再建手術でしたが、専門医取得前の私は、熱傷の手術、皮膚腫瘍の手術、外傷の手術を中心に診療していました。日本手の外科学会は、1992年の京都で行われた第35回に参加したのが最初で、講演内容の理解は不十分でしたが、学会の規模の大きさに驚いた記憶があります。その後、形成外科専門医を取得し、大学院の仕事、米国留学などで手外科にはブランクが生じましたが、帰国後に母校で手足の先天異常や悪性腫瘍の切除再建を中心に再び手外科に関わるようになりました。本学会に入会してからは、主に切断指再接着、熱傷による手指癱痕拘縮、先天異常について今も勉強させていただいております。また北海道大学整形外科の上肢斑のカンファランスに岩崎教授の御配慮で参加する機会を頂戴し、患者さんを前にして皆で診察することがいかに重要であるかを知りました。本学会の専門医試験委員会、編集委員会で昨年まで仕事をさせていただきましたが、委員会活動を介して得た知識は計り知れないものがございます。

現在赴任しております愛知医科大学は、高度救命救急センターを有しています。高度救命救急センターの設置基準の三要件のうち、一件は広範囲熱傷、もう一件が切断四肢の再接着であります。手外科が施設基準の重要な要件となっており、教室員と共に手の再建に取り組みつつ、貴重な手外科の勉強の機会を賜りました本学会に常に感謝しております。

形成外科医の守備範囲には、新鮮熱傷、外傷、血管腫、リンパ管腫、母斑、癱痕拘縮などがあり、これらは決して手に限った疾患ではありません。しかし、手に受傷ないし発症した場合、切除手術、植皮術や皮弁移行術を行う過程で、多くの形成外科医は手の機能と整容の両者を可能な限り回復できるよう治療を計画し、術後手の経過を診ていきます。皮膚皮下組織という境界線を持たぬ臓器を対象としている点で、運動器の再建とはやや異なるように見え、過去には本学会で討論することが憚られるのではないかと感じておりました。今では考えを改め、もう少し形成外科医の学会参加を増やす必要があり、そのためにも形成外科疾患について討論できる場があればと思っています。

本学会の偉大な先輩先生方の背中を遠くに望んで追いかけている私が、このたび理事を拝命し、身の引き締まる思いです。先輩理事の先生方にご指導ご協力を仰ぎながら、平田理事長のもと本学会の発展に寄与できるよう頑張りたいと存じます。なにとぞ宜しく願い申し上げます。

大阪大学大学院医学系研究科器官制御外科学(整形外科) **村瀬 剛**
(教育研修・オンラインマガジン運用委員会、機能評価委員会、情報システム委員会担当)



日本手外科学会理事に就任いたしました大阪大学整形外科の村瀬剛です。私は昭和62年に大阪大学を卒業して整形外科教室に入局、香川医大での研修時に元日手会理事の多田浩一先生の薫陶を受けて手外科を志しました。大阪大学で河井秀夫先生に腕神経叢損傷治療の指導を受けた後、フランス留学、阪大関連病院での研修を経て、2001年より大阪大学で手外科のチーフを務めています。大阪大学では3次元画像を用いた手術シミュレーションや関節キネマティクス研究を中心とした研究を展開し、積極的に情報発信をし

て参りました。

日本手外科学会には平成元年に産業医大で行われた第32回学術集会以来、ほぼ毎年参加し、大きな刺激を受けてきました。私の医師人生を形作った学会と言っても過言ではありません。実際、手外科に入門した当時、日手会誌を読むことから勉強を始めました。日手会誌の論文の一つひとつが新鮮で読むのが大変楽しかったのを今でも覚えております。評議員になってからは、編集委員会、国際委員会、専門医制度委員会、Web登録委員会などの活動に参加してまいりました。私自身が開発した上肢変形矯正用カスタムメイドガイドの実用化に際しては、日手会社会保険委員会と緊密に連携し、同委員会からは多大なご支援を賜りました。私自身を育ててくれた学会の理事に就任したことを大変光栄に思います。

この度の日手会理事就任にあたって、教育研修オンラインジャーナル別冊運用委員会(現 教育研修・オンラインマガジン運用委員会)、機能評価委員会、情報システム委員会の3つを担当することになりました。いずれも大変重要な役割で、気の引き締まる思いです。今なお持続する新型コロナウイルス感染の社会的影響により研修会のあり方は根本的に変わりつつあります。Web開催がスタンダードとなり、それに即応した体制整備が早急に求められています。現在、オンライン・ライブ開催、オンデマンド配信のシステムを構築すべく動き始めております。今年度は春季研修会が延期になったこともあり、今年は春季・秋季研修会を合併して年度内に一回行うことを目標としております。研修の内容に関しては、エビデンスを意識したレクチャーを講師の先生方をお願いしたいと考えております。疾患に関する歴史的背景から治療の変遷、現在の標準治療と問題点、今後の流れ、など文献的エビデンスを意識した講習内容にすることで、世界に通じる手外科医の育成につなげます。機能評価委員会としては、前年度から引き継いだデジタル角度計、Functional Index for Hand Osteoarthritis日本語版の推奨、前腕回旋角度測定法の再検討ほか、世界的に用いられている機能評価法の日本語版の開発に取り組んでまいります。情報システム委員会としては、費用対効果をにらみながら、利便性にも配慮した機能的なシステムを構築するように計画しております。

いずれも新しい仕事ばかりで私自身勉強しながらの取り組みとなりますが、誠心誠意貢献してまいりたい所存ですので会員皆様のご協力を頂ければ幸いです。

新名誉会員のご挨拶

日本手外科学会名誉会員に推挙されて

市立奈良病院 院長 矢島 弘嗣



この度は伝統ある日本手外科学会の名誉会員にご推挙いただき、誠にありがとうございました。身に余る光栄に存じます。本来ならば社員総会の場で理事長から名誉会員証をいただき、皆様の前でひとこと挨拶をさせていただくはずだったのですが、今回はコロナの問題でその儀式がなくなったことは本当に残念です。来年は必ず例年通りの学術集会が開催されることを信じており、その際皆様にお会いして直接お礼を述べたいと切に思っております。

奈良医大の同門として名誉会員になるのは、故増原建二名誉教授、玉井進名誉教授に次いで3人目であると思われま。昭和54年に奈良医大を卒業し、大学での研修を終えて天理市立病院、松原市民病院で4年半の一般整形外科研修を行い、手外科・マイクロサージャリーの研修と研究のために昭和60年に奈良医大に戻りました。もちろん日本手外科学会には入会させていただき、玉井進名誉教授のご指導のもと、キーンバック病や皮弁に関する多くの発表を行いました。そして手関節外科の研修のため、昭和63年に米国コネチカット州のHartford病院に留学し、H. Kirk Watson先生からいろいろな手術を学んで奈良に戻ってきました。その後学会の評議員にさせていただき、教育研修委員会や国際委員会でも多くの経験を積ませてもらいました。平成20年には理事に推薦させていただき、三浪理事長、そして佐々木理事長のもと、4年間教育研修委員会を担当しました。平成26年には再度理事に推薦させていただき、信じられないことでしたが理事長を仰せつかることになりました。やはり理事長としての4年間は、私としては最も重要でそして忘れられない「日手会への関わりの期間」となったわけです。

理事、監事の皆様の協力を得て、そして宗像弁護士のお言葉を聞いて、総会のあり方や進め方に関していろいろと改革することができました。一部定款の変更に関しても代議員の先生方のご理解を得て施行することができました。これにより整形外科と形成外科がより信頼の深い関係を築くことができました。そして2016年9月にオースティンで開催された第71回米国手外科学会(ASSH)においては、JSSHが2度目のGuest Societyに選出され、Neil Johns会長からトロフィーを授与されたことは、理事長としてだけでなく、私個人としても最高の幸せを感じた出来事でした。その後国際委員会においては韓国との交換トラベリングフェローを開始し、最近台湾も加わるようになったようです。今後もJSSHがさらなる海外展開を進めてもらいたいと思っています。また編集委員会の尽力で田島賞、津下賞を制定し、最初の受賞者を表彰できたことは、若い手外科医にとって非常に高い目標になるものと信じております。ガイアフレックスや人工手関節など、手外科専門医の価値

を高めることに関しても一定の仕事ができたのではと自負しています。残念ながら日本専門医機構の内部の問題で、サブスペシャリティに関しては思うように進展しませんでしたし、現在もお停滞しているようです。手外科専門医に関しては執行部の先生方に最優先事項として取り組んでいただくことを切望しています。

最後に、日本手外科学会の益々の発展を祈念し、お礼のご挨拶とさせていただきます。本当にありがとうございました。

新特別会員のご挨拶

日本手外科学会特別会員に推挙されて

北海道医療大学リハビリテーション科学部 青木 光 広



この度は、伝統ある日本手外科学会特別会員にご推挙頂き、誠にありがとうございます。私は札幌医科大学整形外科石井清一名誉教授のご指導の下、1984年の大学院卒業後に手外科研修を開始いたしました。1986年に新潟手の外科研修会に参加ののち、1994年より2年間、JHSアメリカ版の編集長でしたセントルイスワシントン大学のPaul Manske教授の指導を受け、屈筋腱断裂の研究を行いました。大学に復帰後、1999年より同保健医療学部へ赴任し、肩腱板の創傷治癒と再建手術の研究、作業療法士大学院生とともに屈筋腱断裂手術後の早期運動療法に関する研究、テニス肘の病態と発生原因に関する生体力学的研究を行ってまいりました。その間、多数の論文を執筆することができました。2013年から当時の手外科学会理事長矢島弘嗣先生と協力し、解剖学講座実習室においてカダバーワークショップを開催しました。これは日本肘関節学会と交互に開催し第4回まで継続して実施されております。また、2017年に第31回東日本手外科研究会を開催させていただきました。今回の推薦は身に余る光栄と感激すると同時に、これからも手外科を実践し学会に参加することにより、会員の皆様に貢献できるよう日々努力させていただきます。ご指導ご鞭撻をお願い申し上げます。

紙面に余裕がございますので、コロナウイルス感染拡大による大学教育ウェブ授業について書かせていただきます。本年2月にコロナウイルスの感染拡大が報道される中で、3月中旬に札幌市北区あいの里周辺でコロナ症例の発生あるいは疑いが相次いで報告され、北海道教育大学と医療大学の主要通学路であるJR学園都市線の沿線に沿い、ウイルスが伝搬しそうな勢いを感じました。感染経路を考えると、社会的教育が行き届いていない学部生が100人以上教室に集合して1講義目から5講義目まで授業を受ける状況では飛沫感染は必発で、1名でも感染者がいると瞬く間にだれが感染者かわからなくなる状態に陥ると危惧されました。学生登校は禁止となり、卒業式や入学式も中止となりました。4月に入り、対面授業再開のめどが立たない中で、ウェブ授業を開始することとなりました。講義資料を受講者全員に郵送で毎週配布する困難さや、黒板やホワイトボードへ書きながらのウェブ講義は、ハレーションのためマイクで話すことが出来ないため、ウェブカメラでの画像収録と収録をしながらの講義ですので、教員は困難さを感じていました。そこで、ウェブ授業での手間を一気に解決する方法を試みました。その方法は、パソコン備え付きカメラで自分の顔を写し、外付けウェブカメラでブックスタンドに立てた教科書のページをめくりながら、ウェブカメラで拡大して文字列や写真をなぞりマークを付けつつ解説する方法でした。マイク操作やZoom切替え、ページめくり、音響操作、チャット学生からのフィードバックは、アシスタントに担当してもらい、私は

ウェブ講義に集中しました。すると、驚くなかれ、授業で解説できる知識量が対面授業の約2倍となり、授業後のアンケートで理解できたと回答した学生が7割を超えました。あと1か月、合計23回のウェブ授業を済ませてウェブ試験へと進む予定です。実習では対面授業が必須ですが、現時点で座学はウェブがとりわけ有効と考えています。夏休み明けより対面授業が始まりますが3密を回避し、対面とウェブのハイブリット形式の授業を駆使して何とかコロナを乗り切ろうと思います。私のように65歳を超えた人はなおさらのことですが、会員の皆様におかれましても大変お忙しい日常診療のなかで、ウイルスの弱毒化に期待感をもちつつ、どうぞご自愛のほどお願い申し上げます。

日本手外科学会特別会員に推挙されて

日本赤十字社大津赤十字病院 石川 浩三



この度は伝統ある日本手外科学会の特別会員にご推挙いただき誠に有難うございました。大変光栄なことであり、理事長はじめ役員と会員の皆様には厚く御礼申し上げます。私は1977年京都大学を卒業後、京都大学形成外科に入局しました。同期は京都大学形成外科名誉教授の鈴木茂彦先生でそれ以来の長いお付き合いです。入局後四肢の再建と、手外科に興味を持ち、この分野を極めるためには整形外科の基本を学ぶ必要があると考えました。そこで、改めて京都大学整形外科教室に入局し、4年間の一般整形外科と手外科を研修させていただきました。その際には、当時京都大学整形外科助教授をされていた上羽康夫先生に大変お世話になりました。その後も、上羽先生の京大手外科グループの一員に加えていただき、各メンバーたちと現在まで整形外科・形成外科の垣根を超えて仲良く切磋琢磨させていただいております。

手外科領域での小生の活動は、切断肢指再接着に関することが中心でした。当時は、再接着術は時間がかかる、全身麻酔が必要、再接着が成功しても機能的には期待できない等々の医療界一般の偏見がありました。例えば、診療報酬レセプトに伝達麻酔で再接着術を請求したら、全身麻酔でないのに本当に再接着術を行ったのかとの返戻がありました。術前・術後の写真を添付した症状詳記により初めて認められた覚えがあります。普及させる第一歩は麻酔を伝達麻酔でやることからでした。次は、いかに早く手術を終えるかでした。これには、いくつかの検討を要しました。末節以外は重症度と損傷タイプによる再接着率の検討と血管再建法、末節切断は切断レベルごとの血管再建法とその成績、又、composite graftとの比較でした。これらを検討することで、切断部位 (ZoneあるいはSubzone) 別と損傷タイプ (重傷度) 別の治療方針、今でいうガイドラインを自分なりに作成し、学会発表と論文発表を行ってまいりました。その中でも、末節切断のSubzone分類を、多くの会員の皆様に引用していただいたことを、光栄に思っております。また、再接着後の機能再建とその評価も重視し、再接着指の腱を伴う機能再建やmajor amputationの機能的予後も検討しました。これらの手術やデータ整理には、教室員をはじめ、関連病院の関係諸兄にご理解とご協力を賜りましたことを、この場を借りて心より感謝を申し上げます。

委員会活動としては、先天異常委員会、カリキュラム委員会そして施設認定委員会に所属して、担当理事と委員の先生方には大変お世話になり、また勉強させていただきました。

ここ数年は、病院管理者の立場となり、臨床の第一線からは退いていますが、手外科学会や研究会での、皆さんの発表や討論を拝見するたびに、手外科への熱意を感じて頼もしく思っております。

手外科学会の益々のご発展を祈念しつつ、お礼の挨拶とさせていただきます。

日本手外科学会特別会員に推挙されて

東京通信病院整形外科嘱託 沖 永 修 二



この度は日本手外科学会特別会員にご推挙いただき誠にありがとうございました。大変光栄なことで会員の皆様に深く感謝申し上げます。

私は1978年に東京大学医学部を卒業、直ちに整形外科教室に入局し、関連病院で研修中に末梢神経診に入りました。現在では末梢神経外科は手外科の下部領域であることが一般的ですが、東大整形では津山直一教授が全身の麻痺性疾患を広く扱っておられた関係で、手外科診とは別に末梢神経診が独立して存在していました。末梢神経診では、チーフで同郷の先輩である長野昭先生、5学年上の落合直之、立花新太郎、杉岡宏各先生から指導

を受け、これらの先生方の背中を追いかけて今に至ったという感があります。

末梢神経診の最大の課題は究極の末梢神経外傷である腕神経叢損傷の治療でした。当時は末梢神経の画像検査が皆無であったため、詳細な理学所見と電気生理学的検査をもとに損傷部位を探り当て、神経手術と筋腱手術、骨関節手術を駆使して機能再建を行うことは、一種知的なパズルを解く様で再建外科医としての醍醐味を感じさせるものでした。しかし利用材料の乏しい全型神経根引き抜き損傷では治療効果の限界は明らかで、新しい治療法の模索が続いていました。そんな中で、末梢神経診の大先輩であった原徹也先生から、東大形成外科教室の波利井清紀教授のもとで血管柄付き筋肉移植の技術を学ぶよう勧めがあり、この時、実際に指導頂いたのが光嶋勲先生で、進行中であった血管柄付き神経移植の実験を目にして衝撃を受けました。それまで手外科は手術手技偏重ではないかとの疑問を持っていたのですが、新しい治療法の開発にはそれを実現するだけの従来を越える技術が必要であることを痛感させられ 手技の修得に励む契機となりました。2000年から勤務した東京通信病院では、神経領域に関心のあるMRI技術者と偶然出会う機会があり、積年の課題であった腕神経叢損傷の画像診断、さらに全身の末梢神経の画像化の臨床研究が行えたことは非常に幸運でした。学会運営への貢献はわずかで申し訳ないのですが、中では機能評価委員会で、前任の先生方のご苦勞によって完成間近となっていたDASH日手会版の晴れの初出に立ち会えたのは貴重な思い出で、幸運に感謝しています。

現在、COVID-19は社会全体に甚大な影響を与え続けていますが、今まで当たり前と思っていたものを考え直す機会も与えてくれました。その中の手術トリアージで、不急手術の筆頭に手根管症候群の名があげられていたのは、手外科医としては思わず苦笑いでした。これは医療の中の手外科の位置づけを反映したものともいえるでしょうが、不急の手術であることは、逆に手術を行う以上はより完璧に近い結果を求められるということで、プロフェッショナルとしての手外科医の使命感の厳しさとそれを達成するための弛まぬ研鑽の必要性に改めて気付かされました。これまで、巡り会う方々に導かれた幸運な手外科医生活でしたが、今後は少しでもお返しができればと思っています。

日本手外科学会特別会員に推挙されて

南大阪小児リハビリテーション病院 院長 川 端 秀 彦



この度は日本手外科学会特別会員にご推挙いただき、会員の皆様に厚く御礼申し上げます。私は大阪大学卒業後すぐに多田浩一先生から手外科の手ほどきを受けました。当時の大阪大学整形外科学教室は小野啓郎教授が主宰されており、医局員がお互いに切磋琢磨しながら国際レベルの研究を行っている魅力あふれる教室でした。私も神経の基礎研究を行いたいと入局3年目に大学院に入学し、神経の基礎実験を開始しました。さらに大学院在学中に日本手外科学会に入会し、手外科の専門外来にも参加させて頂きました。当時は外傷性腕神経叢損傷の患者さんが多数おられ、神経の一次修復も盛んに行われていました。一方で新生児の腕神経叢損傷である分娩麻痺に対しては積極的な神経修復を行わずに二次再建手術に頼るのが一般的でした。大阪大学では先進的な試みとして分娩麻痺に対しても神経修復術が行われ、先輩の先生方が症例報告を日本手外科学会で発表しておりました。

昭和60年に東京でIFSSHが開催され、その晩餐会の席上でメルボルンのMorrison先生とお話しする機会があって、大学院卒業後に留学したいとの希望を伝えました。この話が瓢箪から駒のように実現し、大学院卒業後にメルボルンにあるMicrosurgery Research Centre, St. Vincent's Hospitalに留学することとなり、そこでmicrosurgeryを学びました。留学後に大阪府立母子保健総合医療センター（現大阪母子医療センター）の整形外科立ち上げに参加することとなり、小児病院の手外科医として分娩麻痺と手の先天異常を専門とする道を歩み始めました。その後600余例の分娩麻痺と3,000例を超える先天異常の治療を担当させて頂きました。microsurgeryを学んだことで分娩麻痺の神経修復、先天異常手に対する足趾移植などを行えたことは幸いでした。さらに同センターでの上司であった安井夏生先生（現徳島大学整形外科名誉教授）に骨延長の手ほどきを受け、microsurgeryと骨延長というふたつの武器を手に入れて先天異常に挑むこととなり、独自の治療法を多数開発しました。

日本手外科学会においては平成10年に評議員となり、平成13年から23年の長きにわたって先天異常委員会委員、委員長、アドバイザーを勤めさせて頂きました。平成22年からは理事を2期4年勤め、後半の2年は落合直行理事長を補佐する副理事長として財務を担当させて頂きました。また在任中には手外科専門医制度の確立にも微力ながらお手伝いさせて頂きました。

十年一日の如く日々は過ぎ去り、たくさんの先生方との交流や日本各地での学術集会の懐かしい思いでを胸に、日本手外科学会を一旦卒業する時がやってきました。日本手外科学会がなおいっそう発展し、会員の先生方がますますご活躍されることを祈願して、特別会員推挙の御礼に代えたいと思います。

日本手外科学会特別会員に推挙されて

松本手の外科塾 黒島 永嗣



1978年に卒業して約40年「科学」を眺めてきましたが、面白い誤りに満ちています。今年は新型コロナが世界的流行。2月上旬NHKは「virus研究所教授の言：マスクの編み目に比べればvirusはとても小さくて」「マスクには予防効果の科学的evidenceはない、米国CDC・WHOも同意見」と2週間ほど流していました。ではマスクは有害で無害なのか(してはいけない)。このような場合、論理(学)的には「悪(偽)でないもの(悪かどうかわからないもの)はなるべく真と認める(許容する)」が正しい。マスクのその後は皆様ご存じの通りです。

日手会には無関係でしょうか？ A法が有効とのevidenceは得られなかった、なのでAは無害と結論(マスクと同じ誤り、Heparin投与は如何に？)。Bをzone分けして、あるsubzoneにC法の有効性を認めたので「BにはCが必要である」と結論。熟練でC法ができるようになっただけかもしれません。

以上は論理的な誤りですが、屈筋腱損傷の治療はどうでしょう。

Verdan : FDS・腱鞘切除+FDP腱縫合・Pin固定→腱の血行が重要→いえ滑液栄養によるintrinsic由来細胞で腱治癒→1982年Potenza完全否定！→それでも続くintrinsic healing (腱鞘閉鎖)と早期運動療法。「世代が変わり」現在、ようやく腱鞘切除はOK+血行無視の腱内糸だらけ縫合+患者・スタッフの努力による早期自動運動療法となっています。conceptが真逆に変わっても以前の実験の解釈見直しはなく、一方、理論の根拠を完全否定されても臨床の方向性は変わりません。「無痛で、煩雑な後療法不要」の理想にほど遠く、確信のバイアスは強力です。

臨床の基本を二ノ宮節夫先生と奥津一郎先生に教えていただきました。その後、医師の労働環境は重大な違法状態にあることを労働省(旧)に知らしめ、精度を一桁上げた高性能顕微鏡開発とHalf-millimeter Microsurgeryの端緒をつけることが出来たのは、自分の背を任せられる畏友(飛松治基)や同僚(木村理夫・小林康一)に恵まれたからでした。

そして今回、特別会員になれたのは、偏に、岡義範先生の長年のご尽力と温かい励ましのお陰で、用語集改訂第4版が発刊できました。池田全良・小林明正・武石明精・坪川直人・松村一・渡邊健太郎(敬称略)委員の皆様には、1000カ所(!)という胃の痛くなるような数の修正・訂正をしていただき、心からお礼を申し上げます。

用語は単なる単語ではなく、先人の苦闘を含むものです。古い用語を削除せずに《旧》と付したことには意味があります。常識を正す大転換Paradigm shiftには、「次の世代」が経緯を正しく知り、自ら考え、正しい選択をすることが必要なのです。

「手の外科」の発展を祈ります。

日本手外科学会特別会員に推挙されて

新潟県立吉田病院整形外科 田中英城



この度、歴史と伝統のある日本手外科学会の特別会員に選出していただき大変光栄に存じます。

自己紹介もかねてご挨拶申し上げます。

1980年、新潟大学整形外科の田島教授の教室に入局いたしました。一般整形外科及び麻酔科研修を経て、1985年から手の外科班に加えていただきました。

当時、教室には吉津、(故)勝見、関、そして米国から帰国されたばかりの斎藤(英)先生の他、多くの中堅手の外科医が在籍しておりました。また海外からの留学生や学会で立ち寄られる先生方の来局も頻繁で、それだけに教授回診、症例検討会や抄読会でも活発な討議がなされ、まさにHAND王国の不夜城で過ごしました。

Titel Arbeitを終え、田島教授に腱の研究のできる海外留学をお願いしていたところ、1991年夏に米国セントルイスのP.R.Manske先生の下でリサーチフェローとして採用いただきました。そこでは本業の腱の実験に加え末梢神経内血行、さらに脊髄神経損傷の実験などにも携わってきました。

帰国後は新潟大学整形外科の同門同期の関谷(繁)君のおかげで、1994年4月から香川医科大学(現香川大学)整形外科に籍を置き、ハンドグループを引き継がせていただきました。

当時、グループのメンバーは数名でしたが、研修医とともに臨床、教育及び研究に深夜まで追われておりました。共に働いた香川大学整形外科の先生方にもこの場を借りて御礼申し上げます。

1998年には評議員にいただき、幾つかの委員会にも所属させていただきました。

用語委員会においては手外科用語集改訂第4版をベースに、Green Operative Hand Surgery(第6版)から新たな用語を抽出、翻訳し、これらも加えて電子化する作業を行いました。すべての用語を出典から改めて吟味し直し、時にはパブリックコメントも求めて地道に作業をいたしました。また素人にはあまり馴染みのない著作権などの制約も気にしながら、一步一步すすめてまいりました。そして、2016年4月、ようやく手外科用語集改訂第5版(電子版)；電子版としては初版、の発刊にこぎつけることができ、委員長としての大役を退かせていただきました。ただし、その先の目標でもあった日本整形外科学会、日本形成外科学会の用語との整合性をとること、日本医学会医学用語辞典と統合への道筋をつけることまではできなかったことは悔やまれます。

歴代の用語委員会の諸先生方のご努力に深く敬意を表します。

2002年4月から新潟に戻り、臨床医として勤務しております。これまで新潟大学及び香川大学の整形外科教室の多くの先生方に大変お世話になりました。とりわけ香川大学時代には中国／四国及び近畿地方の先生方とも学会、研究会を通して、間近に接する機会をいただき、田島手の外科の枠にとらわれることなく、新しい方法や柔軟な発想を学ぶ機会となり、有意義で私の大きな財産となりました。

最新のマニュアルやガイドラインに沿えば、安全で一定の成績は得られますが、それに捉われすぎでは独創的、斬新な考えや方法など生まれるはずがありません。手の外科の世界には新しいアイデアを発揮できる余地が残っています。まだまだ興味、面白さを追求できます。

手の外科を通してお会いできた多くの先生方に感謝いたします。そして、今後も学会に微力ながら貢献できれば大変光栄であります。

最後に日本手外科学会の今後益々の発展を祈念して、お礼の言葉とさせていただきます。

日本手外科学会特別会員に推挙されて

社会医療法人三車会 貴志川リハビリテーション病院 副院長 谷口 泰徳



この度は伝統ある日本手外科学会の特別会員にご推挙いただき大変光栄に存じます。会員の皆様には心から感謝を申し上げます。

私は和歌山県立医科大学を卒業し、整形外科教室に入局しました。私が手外科を始めるきっかけは、1986年7月に新潟手の外科研究所主催の手の外科セミナーに参加し、新潟大学整形外科田島達也教授の講義に感銘を受けたことでした。新潟手の外科セミナー参加後、すぐに手外科研修のための国内留学を、和歌山県立医科大学整形外科の玉置哲也教授に懇願しました。

玉置教授からは、当時津下健哉教授から生田義和教授に教授交代されたばかりの広島大学整形外科に研修に行く様に勧められました。そして1988年4月から1年間、広島大学整形外科生田義和教授、広島県立リハビリテーションセンター津下健哉所長に師事し手外科、マイクロサージャリーの研鑽を行いました。

その後は和歌山県立医科大学、関連病院で31年間にわたり手外科、マイクロサージャリーの臨床研究、診療、教育を続けてきました。2001年に日本整形外科学会からJOA-AOA Traveling Fellowに選出され、アメリカのKleinert Instituteなどの手外科施設での研修、交流が大変刺激になりました。臨床研究としては、キーンバック病、絞扼性末梢神経障害などに関する多くの論文発表をさせていただきました。2010年5月にキーンバック病の国際会議がオーストリアのウィーンで開催されましたが、この会議は、ウィーン出身のRobert Kienböck先生が1910年に世界ではじめてキーンバック病の論文を発表し、その100周年を記念して企画されました。この国際会議にシンポジストとして招待されキーンバック病について講演をさせていただいたことが、今では大切な思い出となっています。

日本手外科学会では、1999年より評議員・代議員を拝命し活動して参りました。その後、広報委員、施設認定委員、学会誌編集委員長として日本手外科学会のために微力ながら尽力させて頂きました。また学会役員として2017年から2年間、監事として職責を果たすことができました。特に2015年から5年間にわたり、編集委員長、アドバイザーに就任させていただきましたが、査読、編集、出版の業務のほか、投稿規定の改定、オンライン論文投稿システムの改善に取り組むことができました。

また2017年に学会奨励賞「田島達也賞・津下健哉賞」が若い手外科医の育成、学術研究の発展に寄与することを目的として創設されましたが、編集委員長として本賞の創設の一員として参加できたことは大変光栄に存じております。そしてこの奨励賞受賞者から未来の日本手外科学会を担う先生方が輩出されればこの上ない喜びです。

今後は手外科の診療を中心に地域医療の貢献に尽力していく所存です。引き続きご指導ご鞭撻の程よろしくお願い申し上げます。

最後に日本手外科学会の今後の益々のご発展と会員皆様方のご健勝を祈念いたします。

日本手外科学会特別会員に推挙されて

日本大学医学部形成外科 仲 沢 弘 明



この度は、日本手外科学会の特別会員に推戴いただき誠にありがとうございます。歴史のある本学会の特別会員の末席につかせていただきますこと大変光栄に存じます。

私の本学会に初めて参加したのは、1989年に開催されました第32回本学会(鈴木勝巳会長、産業医科大学)です。私の恩師である野崎先生(前東京女子医科大学形成外科主任教授、東京女子医科大学名誉教授)がモーニングセミナーの講師を依頼され、「熱傷における手の治療」について講演されましたが、かばん持ちとして私を当学会に連れて行ってくださり、2日間、本学会に参加させていただきました。多くの講演と発表を拝聴し、手外科とは大変面白いもの、と興味をもち、帰局後、すぐに本学会の会員になりました。以後、手指の再接着など外傷による手外科の手術を行ってきましたが、特に軟部組織再建の方法として静脈皮弁(arterialized venous flap)を数多く行い、その有用性について本学会、日本形成外科学会、日本マイクロサージャリー学会などで発表しました。

日本専門医制評価・認定機構(現 日本専門医機構)のサブスペシャリティ領域における「2階建て専門医」の条件として、当該する2つの学会(日本形成外科学会と日本整形外科学会)がバランスよく構成され運営されることなどが挙げられました。そのために、形成外科の理事数を増やすこと、形成外科医の専門医数の増加のために「暫定制度」をとることになりました。しかし、この方針に対し、一部の整形外科の先生方からは強い反対の意見が上がり、第55回(別府諸兄会長)の代議員会で激しい意見の応酬がありました。本学会の発展のためには必要な対策であると承認されました。第57回(金谷文則会長)の代議員会では、これまで一度も行われなかった理事選挙が行われました。私も候補者の一人として、3分間のプレゼンテーションを行いました。開票の結果、何と、私がトップ当選ということで、大変驚くとともに今後の重責を深く感じました。それ以後、理事選挙は行われておりませんが、この選挙でのトップ当選は、私の数少ない自慢の一つです。

理事就任後は、専門医試験委員会担当理事、学術研究プロジェクト委員会担当理事を仰せつかりました。専門医試験委員会は年に数回開催され、委員各位が作成した問題を全員でブラッシュアップします。内容が非常に高度であり、委員会が終了するたびにへとへとになって帰宅したのですが、私自身、大変勉強になりました。学術研究プロジェクト委員会は、会員から応募された手外科に関する基礎研究や臨床研究を審査するのですが、いずれも優れた研究であり、心情的にも優秀をつけるのが大変困難でした。

本年3月末で日本大学医学部形成外科を定年退職し、現在、新しい職場でコロナ感染に注意しながらのんびり過ごしております。最後になりますが、本学会の益々のご発展と会員各位のご健勝を祈念しております。

日本手外科学会特別会員に推挙されて

関西医大 整形外科 堀 井 恵美子



特別会員に推挙していただきありがとうございます。1985年に入会させていただき、あっという間の35年間でした。卒後7年経過した、1986年に三浦隆行先生・中村蓼吾先生率いる名古屋大学分院にて、手外科の勉強第一歩を踏み出しました。当時は手関節外科が盛で、“TFC”に出会い、解剖教室に通って手関節靭帯の勉強を始めました。先輩に進められてMayoを訪問したのが1988年のことです。Visitorとして訪問したのですが、偶然Research fellowの空席があり、そこで、1年9か月 Drs. Chao & Anの下で勉強させていただきました。短期間でしたが、Marc Garcia-Elias, やShawn O’ Driscoll

と机を並べる機会を得て、世界が広がりました。お二人は手関節・肘関節の分野で各々世界のリーダーとなられましたが、間近でお二人の研究に臨む姿勢を勉強したことは、非常に勉強になりました。

帰国後、三浦先生の臨床からの退官に伴い、思いがけず、先天異常の分野に足を踏み入れることになりました。先天異常は歴史が古く、臨床成績が出るのに時間もかかり、基礎的なバックグラウンドをがないので苦労しました。荻野先生の元で、母指化術の勉強をした事を契機に、色々ご指導いただけるようになりました。先生のご厚意で、Congenital Hand Anomaly Study Groupという会に参加させていただき、以後、世界中の先天異常の巨匠の手術見学や、mailでご指導を仰げるようになり、大いに勉強させていただきました。

日手会では、1997年に評議員に推挙いただいて以降、主に先天異常委員会で仕事をさせていただきました。日手会先天異常分類の初版刊行・母指多指評価表作成に関わりました。また、より多くの会員の方に先天異常の勉強の場を作ろうと、先天異常懇話会を学術集会行事として開催するように奔走しました。

2010年代になると、医学会で男女共同参画の動きが始まりました。日手会では、第55回の学術集会で、女性医師のシンポを持たせていただき、手外科専門医の取得が、出産育児の時期と重なり大変であるご意見を頂きました。これを契機に、女性会員有志で学会に働きかけ、受験資格の一部変更がかないました。2017年には女性医師支援ワーキンググループ(男女共同参画委員会)ができ、2019年度より正式に委員会として活動を開始しています。(参考：日手会ニュース51号Joyの声第1回)

紆余曲折を経ましたが、最終的には先天異常と肘関節外科について、最も多くの時間、勉強させていただき結果となりました。現在、齋藤教授のご好意で、関西医大に在籍しており、京都府立卒業以来、始めて関西に戻ってきました。日赤時代は、同僚の先生方のご厚意に甘えて、先天異常・肘関節治療に没頭させていただいたのですが、今は、指の人工関節や、“関西流手外科”を学びながら、整形外科1年生の助手を相手に、手外科の基本をぶつぶつぶやきながらメスを握っています。

最後に、大学という枠を超えてご指導いただきました多くの先生方・同僚の先生方、40年間温かく守ってくれた家族に心より感謝いたします。

日本手外科学会特別会員に推挙されて

南川整形外科・Numba Hand Center 理事長 南川 義隆



私の特別会員の選出には、医師になって間もなく海外に飛び出したことが強く影響していますので、最近少なくなった、海外留学の勧めとして書きたいと思います。1980年に関西医大を卒業して、整形外科に入局後教室からの許可を得て直ぐに1年8か月の米国Buffaloへ語学留学の機会を得ました。1986年の東京でのIFSSHではBuffaloで出会ったDr. PeimerからHand Center Western New Yorkへの正式な留学のお誘いがあり、翌年から2年半のBuffaloでの生活、その後もMayoクリニックに移り1年余り滞在しました。この時のMayoのHand staffが、Drs, Morrey, Dobyns, Linscheid, Beckenbaugh, Cooney, Amadioまた、Biomechanics Lab. にはDrs. Chao, An, Research fellowとしてDrs. Garcia Elias, O' Driscollに堀井、今枝、井出先生などが在籍していました。3年半の米国留学期間中に世界中の著名な先生方また日本からの訪問者も多く、これらの出会いは若輩の私にとってその後の手外科医としての力強い後ろ盾となりました。帰国後には当時はあまり英語が話せる先生が少なかったこともあり、IFSSHのimplant committeeのメンバーの推薦を受け、それ以降のほとんどのIFSSHのシンポジストの招待を受けました。しばらくしてArthritis committeeのメンバーからChairmanにも選任いただきました。Mayo Hand Clubの影響力を痛感しました。国内では、国際委員に選出後5thAPFSSHの事務局長、国際委員会委員長を2期務めました。Travelling fellowの受け入れや直接のお世話も楽しくさせていただきました。特にBunnel Travelling fellowは、ASSHの中心人物の登竜門となります。私の専門分野のリウマチ、人工関節に限ってもDrs. Arnold Peter Weiss, Kevin Chung, Marco Rizzoの初来日に立ち会った思い出があります。還暦後にNumba Hand Centerを開業しましたが、4か月で視床出血で6か月入院となり、いまだに左半身は不自由な状況です。故山口利人先生の東京手の外科研究所にほぼ10年間在籍しましたが、彼の“学閥の垣根を取り払った施設を作る”との理念を引き継ぎ開院当時から関西各大学の先生方に協力をいただきました。現在も関西医大以外からも複数の手外科専門医をお迎えして診療ができているのも、日本手外科学会の活動により出会うことのできたたくさんの先生方のおかげです。ありがとうございました。

2020年度 各委員会委員

(五十音順・敬称略)

●常設委員会

緊急事態対応委員会

担当理事 岩 崎 倫 政
委員 金 潤 壽 島 田 賢 一 富 田 一 誠 中 道 健 一
三 浦 俊 樹 山 本 真 一
オブザーバー 田 中 克 己

財務委員会

担当理事 岩 崎 倫 政
委員長 山 本 真 一
委員 金 潤 壽 富 田 一 誠 中 道 健 一 三 浦 俊 樹

教育研修・オンラインマガジン運用委員会

担当理事 村 瀬 剛
委員長 山 本 美知郎
委員 今 田 英 明 小 笹 泰 宏 児 玉 成 人 多 田 薫
辻 井 雅 也 辻 英 樹 中 川 泰 伸 中 島 祐 子
中 山 政 憲 成 島 三 長 西 田 圭一郎 原 章
オブザーバー 山 崎 宏

編集委員会

担当理事 面 川 庄 平
委員長 池 口 良 輔
委員 池 田 全 良 石 河 利 広 入 江 徹 入 江 弘 基
岩 部 昌 平 江 尻 荘 一 岡 田 貴 充 長 田 伝 重
織 田 崇 小 田 良 加 藤 直 樹 金 城 政 樹
小林 由 香 坂 本 相 佐 竹 寛 史 篠 原 孝 明
田 鹿 毅 峠 康 長 尾 聡 哉 二 村 昭 元
林 原 雅 子 松 浦 佑 介 松 崎 浩 徳 山 部 英 行
アドバイザー 河 村 健 二

用語委員会(活動終了後、編集委員会へ統合)

委員 藤 卷 亮 二 森 澤 妥 (左記二名は終了後、編集委員会へ)
原 友 紀 松 本 泰 一 山 内 大 輔

機能評価委員会

担当理事 村 瀬 剛
委員長 金 内 ゆみ子
副委員長 飯 塚 照 史
委 員 阿久津 祐 子 池 田 純 小田桐 正 博 茶 木 正 樹
西 脇 正 夫

国際委員会

担当理事 中 村 俊 康
委員長 村 田 景 一
委 員 市 原 理 司 岩 本 卓 士 岡 田 充 弘 川 崎 惠 吉
建 部 将 広 藤 尾 圭 司 森 崎 裕 吉 田 綾
アドバイザー 柿 木 良 介 金 谷 文 則

広報渉外委員会

担当理事 古 川 洋 志
委員長 岸 陽 子
委 員 金 谷 耕 平 佐 藤 光 太 朗 寺 本 憲 市 郎 中 川 夏 子
原 友 紀

社会保険等委員会

担当理事 大 江 隆 史
委員長 岡 崎 真 人
委 員 鈴 木 拓 高 瀬 勝 己 瀧 上 秀 威 藤 田 浩 二
普天間 朝 上 松 浦 慎 太 郎

先天異常委員会

担当理事 福 本 恵 三
委員長 牧 野 仁 美
委 員 上 里 涼 子 洪 淑 貴 齊 藤 晋 佐 竹 寛 史
四 宮 陸 雄 高 木 岳 彦 鳥 谷 部 莊 八 根 本 充
アドバイザー 関 敦 仁

倫理利益相反委員会

担当理事 福 本 恵 三
委員長 恵 木 丈
委 員 鈴 木 克 侍 辻 本 律
外部委員 塚 田 敬 義 山 我 美 佳

学術研究プロジェクト委員会

担当理事 島 田 賢 一
委員長 藤 岡 宏 幸
委 員 安 楽 邦 明 加 地 良 雄 四 宮 陸 雄 関 敦 仁
高 木 岳 彦 藤 原 浩 芳 森 谷 浩 治

専門医制度委員会

担当理事 西 田 圭一郎
委員長 稲 垣 克 記
委 員 池 上 博 泰 面 川 庄 平 垣 淵 正 男 亀 井 讓
佐 藤 和 毅 島 田 賢 一 砂 川 融 田 尻 康 人
松 村 一 森 田 晃 造

専門医資格認定委員会・施設認定委員会

担当理事 島 田 賢 一
委員長 中 尾 悦 宏
委 員 荒 田 順 長 田 龍 介 鎌 田 雄 策 小 橋 裕 明
齊 藤 晋 鳥 山 和 宏 長 谷 川 健 二 堀 内 孝 一
松 井 雄 一 郎 森 田 哲 正 和 田 卓 郎

専門医試験委員会

担当理事 西 田 圭一郎
委員長 山 崎 宏
委 員 岩 倉 菜穂子 上 田 晃 一 大 安 剛 裕 竹 内 直 英
田 中 啓 之 内 藤 聖 一 人 南 野 光 彦 西 田 淳 健
根 本 充 橋 本 一 郎 長 谷 川 和 重 松 田 健
アドバイザー 長 尾 聡 哉

カリキュラム委員会

担当理事 内 山 茂 晴
委員長 坂 野 裕 昭
委 員 大 井 宏 之 梶 原 了 治 黒 川 正 人 高 木 誠 司
谷 脇 祥 通 山 内 大

情報システム委員会

担当理事 村 瀬 剛
委員長 西 浦 康 正
委 員 岩 崎 倫 政 一 内 山 茂 晴 大 江 隆 史 面 川 庄 平
島 田 賢 一 副 島 修 三 中 村 俊 康 西 田 圭 一 郎
平 田 仁 福 本 恵 三 古 川 洋 志

キャリアアップ委員会

担当理事 副 島 修
委員長 長 田 龍 介
委 員 上 里 涼 子 洪 淑 貴 千 馬 誠 悦 恒 吉 康 弘
長 尾 由 理 仁 中 川 夏 子 林 原 雅 子 原 友 紀
日比野直仁 藤 井 裕 子 牧 野 仁 美
アドバイザー 平 瀬 雄 一 堀 井 恵 美 子

●特別(臨時)委員会

定款等検討委員会

担当理事 内山茂晴
委員長 麻田義之
委員 射場浩介 岩月克之 上原浩介 大谷和裕
川勝基久 楠原廣久 櫻庭実 松本泰一
横田淳司

手外科専門医検討委員会

委員長 副島修
委員 三上容司 朝戸裕貴 酒井昭典 助川浩士
吉井雄一
アドバイザー 加藤博之 矢島弘嗣

監事紹介

垣淵正男 佐藤和毅

物故会員への追悼文

故 三浦隆行先生を偲んで

日本手外科学会理事 長 平 田 仁

日本手外科学会名誉会員である三浦隆行先生が令和2年2月1日にご逝去されました。人生の大半を手外科に捧げ、本学会発展に限りなく貢献された先生の素晴らしい業績を振り返り、会員の皆様と共にご逝去を悼みたいと思います。

三浦先生は昭和31年に名古屋大学医学部をご卒業になり、同年松丸寛教授の門徒として整形外科に入局されています。当初は股関節外科を専門とされていましたが、若くして頭角を現し早くも昭和43年には整形外科講師を任ぜられ名古屋市東院町に新設された分院に配属されています。当時は戦後復興期を過ぎ、急速な工業化やモータリゼーションが進行する高度経済成長期であり、我が国には労災事故や交通事故による上肢外傷が急増していました。そのような中で九州大学、新潟大学、広島大学、奈良県立医科大学を拠点に手外科が急速に発展し始めた状況でしたが、全国最大の産業集積地である東海地区の動きは鈍く、他の地域の後塵を拝していました。このような背景もあり、先生は分院赴任を契機に専門領域を手外科にシフトし、木野義武先生、前田敬三先生、中村蓼吾先生(当時は大学院生)と共に手外科診療を開始されました。先生はとりわけ先天異常と手の外傷の治療に力を入れましたが、木野先生が世界に先駆けて作成に成功した絞扼輪症候群の動物モデルは名古屋大学の名を世界に知らしめる号砲となりました。その後名古屋大学分院には駒田俊明先生、千葉晃泰先生、井上五郎先生、堀井恵美子先生など次々有能な若手が合流し、名古屋大学分院は有数のHand Surgery Centerとして全国にたちどころに知られるようになり、また、三浦先生は分院での臨床研究の成果をまとめて「手の外傷」「手の先天奇形」「Atlas of Congenital Hand Anomalies」という3冊のテキストを出版されています。昭和58年には名古屋大学第4代教授に就任され鶴舞にある本院に移りましたが、教授就任後も手外科の発展に努め、昭和63年には第31回日本手外科学会を主催され、翌平成元年には第63回日本整形外科学会会長を勤められ、同年の公益社団法人への移行に伴い日本整形外科学会初代理事長にも就任しています。当時手外科ではバイオメカニクスをベースにする手関節研究が勃興しつつありましたが、先生はこの際も動きが早く、平成3年には世界中から手関節研究の第一人者を集めて名古屋市においてInternational Wrist Symposiumを開催しています。三浦先生の教授在籍期間は10年弱でしたが、手外科に更なる発展の余地を感じていた先生は全国初の手外科講座の開設を目指して名古屋大学および文部科学省と精力的に交渉を進め、その結果平成13年講座設置が正式に認められ、中村蓼吾先生が初代教授に就任しています。国際手外科連合では1986年以来手外科学の発展に特段の寄与があった医師をPioneers of Hand Surgeryとして表彰していますが、三浦先生は2001年にその榮譽に浴しています。これは天見民和先生、津下健哉先生、田島達也先生に続き日本人で4番目での受賞でした。

三浦先生は私にとっても特別な人でした。私は三重大大学の出身ですが、三浦先生は三重県鳥羽市のお生まれで、思春期の大半を亀山市で過ごされています。旧制三重県第2中学校(現三重県立四日市高校)から私の故郷にある旧制松本高等学校に進まれ、その後名古屋大学に入学されています。そんな関係もあってか三浦先生は研究会や学会の場でしばしば私に声をかけて下さりました。私は初期研修を静岡県で受け、昭和59年に帰局してから藤澤幸三先生の指導のもとで手外科を学び始めましたが、整形外科の他の分野と比較して手外科は難解で、津下先生ご執筆の“手の外科の実際”や“Green’s Operative Hand Surgery”を読んでもあまり理解できず、苦戦をしていました。そんな私にとって最も身近な学びの場が三浦先生が主催していた東海手の外科カンファレンスであり、実際の患者に対して三浦先生をはじめ名古屋大学の先生方がどのように診察をされ、治療を考えていくのかをつぶさにメモに残し、戻っては見聞きした内容を教科書や論文で確認することで多くを学びました。終いには症例を見ると三浦先生の答えをほぼ正確に予測できるまでになりましたので、直接の指導を受ける機会はありませんでしたが、三浦先生を恩師と仰いでいます。奇しくも、平成17年に中村蓼吾先生の後任として名古屋大学手外科学講座に赴任することになりましたが、三浦先生は中村先生とともに公私にわたり大変強力にサポートして頂き、教室の発展を導いて頂きました。

三浦先生は持てる能力を惜しみなく手外科に捧げ、多くの人材を育て、学会の発展に貢献されてきました。75歳を過ぎても毎日3kmの水泳を欠かさず、心身ともに壮健な方でしたが、心房細動発作により生じた心房内血栓が原因で遊泳中に脳梗塞を起こし、最後の10年ほどは重度の右片麻痺と構音障害に苦しみました。しかし、最後まで知能は衰えることなく、私共後進に対しても深い配慮を欠かすことがありませんでした。昨年末には嚥下障害が悪化し、重度の誤嚥性肺炎を繰り返すようになり、ご自身で判断されて栄養摂取を絶たれ、本年2月に永遠の眠りにつかれました。しかし、先生の遺志は一人一人の胸に刻まれ、いつまでも我々の心に生きることと思います。ご厚情に感謝をするとともにご冥福を心より祈ります。

故 平澤泰介先生を偲んで

十条武田リハビリテーション病院 勝見 泰和

令和2年3月4日肺炎にて恩師の平澤泰介先生がご逝去されました。京都府立医科大学整形外科教室に入局以来、永年にわたりご指導をいただけてきましたので、何か心に大きな穴が空いたような気持ちで日々過ごしております。先日、納骨前のお宅にお邪魔をし、最後のお別れをするとともに、長時間にわたり先生の思い出を奥様と語ってきました。

平澤先生との思い出が走馬灯の如く映り出されます。先生と初めてお会いしたのは、私が京都府立医科大学(以下、府立医大)の6回生に溯ります。リハビリテーション医学に関するポリクリでしたが、担当の平澤先生は大学卒業後の自分の歩みについて実習の多くの時間を費やされました。1963年に大学を卒業して直ちに横須賀の海軍病院でインターンをされたこと、府立医大整形外科入局後にアメリカUCLAでResearch Fellowをされたこと、帰国後また日本リウマチ協会の派遣によってハーバード大学でClinical Fellowをされたことなどを話されました。その講義のなかで国際性豊かな整形外科医を育成したいという言葉に惹かれて、私は整形外科医になろうと決心しました。

その後も平澤先生の広い視野のマインドは変わることがなく、国内外を問わず大学の垣根を取り払って交流されていました。外国からの医師が来られることは日常茶飯事で、手外科班はいつも集合することになっていました(写真1)。教授就任後は人脈を生かして、欧米の7つの大学や施設に多くの留学生を派遣されました。アメリカ整形外科基礎学会(ORS)での採用演題は2桁になる年もあったことから、ORSのAdvisory Boardのメンバーとして6年間活躍されました。日本手外科学会では理事として国際委員会や機能評価委員会を担当され、第43回日本手外科学会学術集会や第3回日米手外科合同会議を会長として主催されました。これまで私が見てきた平澤先生の姿勢は、一言でいえば「地球人離れた異星人」のような存在でした。同門会からの要望がありましたが、還暦記念会や退官記念会などの華美な式典は固辞されました。

退官後、また明治国際医療大学でともに研究ができることになり、functional MRIを応用した痛みの研究で国際学会のベストポスター賞を授与できたことは嬉しい思い出です。宴席で酔うと、花巻出身の平澤先生はズズー弁で「春になれば一白子も溶けて、どじょっこだのふなっこだの…」とよく歌われました(写真2)。また花巻の特攻隊基地が生家の近くにあったためか、20歳代の若い特攻隊の青年将校の話もよくされていました。学会での質問は演者が答え易いようなものが良いと教わりました。平澤先生の優しさの一面を表す言葉でもあり、すべての人にフランクに接し、一期一会を大切にされていました。郷里の宮沢賢治が大好きだった平澤先生、安らかに眠りください。



写真1:1985年12月5日、兵庫医科大学の田中寿一先生がTübingen外傷病院のProf. Reilを連れて京都府立医科大学を訪問された時のものです。整形外科外来の片隅でしたが、丁寧にプレゼンテーションをしていただきました。



写真2:2007年4月19日山形で開催された第50回手外科学会学術集会で、手外科班のメンバーとともに撮った写真です。山形は岩手県花巻の近くのためか、宴席ではお酒がすすんでいました。

故 原徹也先生を偲んで

昭和大学医学部整形外科学講座 稲垣克記

(中川整形外科 中川種史)

原徹也先生は昭和31年横浜市立大学を卒業され、インターン後昭和33年東大整形外科に入局されました。学生時代より、筋電図などに興味をもたれ生理学の市河三太先生の研究室に入入りされていたとのことでした。その後市河先生は昭和大学教授に異動され永く教鞭をとられました。市河先生の後、本間生夫先生が昭和大学生理学教室を主宰され、呼吸生理学を中心に研究されておりましたが、原先生は本間先生とともに肋間神経交差縫合術後の呼吸機能と上腕二頭筋との関係などの機能転換について多くの共同研究を企画され、幾人ものスタッフが昭和大学医学部第2生理学教室で研究したことで、原先生との関係が長く築かれてきました。

原先生は、東京大学の医局に入局後いくつかの関連病院を回られた後、大学に戻られ、元来興味があったポリオ、分娩麻痺などの神経障害の症例についてその後教授になられた津山直一先生とともに取り組まれました。その後、モーターゼーションが発達しオートバイ事故が増加するとともに、腕神経叢損傷とくに神経修復が困難な神経根引き抜き損傷が多く発生しました。その診断と治療を津山直一名誉教授とともに当たられ肋間神経交差縫合術を考案されました。その後都立広尾病院に移られて、都の救急医療の中心を担うとともに腕神経叢損傷、分娩麻痺の治療に努められ、赤坂嘉久先生とともに腕神経叢引き抜き損傷の前腕機能再建や陳旧例への治療を下肢からの遊離神経血管付き筋肉移植を利用して行うことを実用化され国際的な評価を受け、世界から多くの外科医が手術の見学に訪れました。その当時3年間、原先生の下で働く機会がありましたがほぼ毎週のように夜遅くまで、肋間神経移行術、遊離筋肉移植、スタインドラー手術、分娩麻痺患児への前腕回内再建術等が入っていたのを懐かしく思います。

原先生はご多忙な中、WPOA、日本手外科学会を始め各学会において、ご自身の治療した症例をまとめて発表する仕事について興味をもった各スタッフに与えていらっしゃいました。そのため、都立広尾病院に一度お世話になった外科医は末梢神経を専門にすることも多く、現在活躍されている先生たちも一度は原先生の下で働いた経験があるとお聞きます。

広尾病院の部長を務められた後は、都立病院での階級が上がるにつれ、都立豊島病院副院長、都立荏原病院院長そして東京都リハビリテーション病院院長と先生の管理職としての能力の高さを発揮されましたが、本来のホームグラウンドである広尾病院に戻れることはありませんでした。しかし、学会ではいつも多くの指導された先生に囲まれていらっしゃいました。

原先生は、あまり運動もされず、歩くことも好きではなくタクシーを常用され、ヘビースモーカーでもいらっしゃいましたが、あまり体を害されることも無く重責である病院長の仕事を全うされました。退職後は、後輩のクリニックの手伝いや地域の方々とゴルフなどをされ悠々自適な生活を送っていらっしゃいました。お時間ができたこともあり、昭和大学にも月2回神経外来に来ていただき、多くの患者さんを診察して頂きました。

晩年は歩行能力が低下して奥様にお世話を受けていらっしゃいましたが、お話は普通にされてい

らしたようです。昨年12月のある日、座っているうちに静かに永眠されていたとのことでした。原先生の影響を受けた外科医は現在も多くの病院で中心的な仕事をしております。また先生の開発した技術は発展し、国際的にも多くの病院で応用が進んでおります。原徹也先生の医学的業績とともに、多くの後輩を育てた人格を惜しみつつ、この原稿を閉じたいと思います。原 徹也先生、どうか安らかに眠りください。

教育研修会のお知らせ

◆第26回春期・秋期教育研修会◆

会 期：2021年
会 場：オンデマンド配信
詳 細：準備中

.....

◆第64回日本手外科学会学術集会◆

会 期：2021年4月22日(木)～23日(金)
会 場：長崎ブリックホール、長崎新聞文化ホール(開催形態については現在検討中)
会 長：田中 克己(長崎大学大学院医歯薬学総合研究科 形成再建外科学)

.....

関連学会・研究会のお知らせ

◆第31回日本末梢神経学会学術集会◆

会 期：2020年9月11日(金)～12日(土)
会 場：ホテルスプリングス幕張
会 長：桑原 聡(千葉大学大学院医学研究院脳神経内科学 教授)
詳 細：<http://jpns31.umin.jp/>

.....

◆第33回日本臨床整形外科学会学術集会 どもんなか学会 愛知◆

会 期：2020年9月16日(水)～10月23日(金)
会 場：オンライン開催
会 長：前田 登(愛知県整形外科医会 会長/前田整形外科クリニック)
詳 細：<http://www.congre.co.jp/33jcoa/>

.....

◆第29回日本形成外科学会基礎学術集会◆

会 期：2020年10月8日(木)～9日(金)
会 場：パシフィコ横浜 ノース
会 長：前川 二郎(横浜市立大学形成外科学)
詳 細：http://www.jsprs.or.jp/member/information_society/2020/detail.html?num=2

.....

◆第35回日本整形外科学会基礎学術集会◆

会 期：2020年10月15日(木)～16日(金)
会 場：京王プラザホテル(Live配信・オンデマンド配信)
会 長：山本 謙吾(東京医科大学整形外科学分野 主任教授)
詳 細：<https://site2.convention.co.jp/joakiso2020/information.html>

.....

◆第47回日本マイクロサージャリー学会学術集会◆

(第5回アジア太平洋マイクロサージャリー学会(APFSRM)との合同学術集会)

会 期：2020年11月20日(木)～21日(金)
会 場：北九州国際会議場
会 長：服部 泰典(小郡第一総合病院 整形外科)
詳 細：<http://jsrm.umin.jp/meeting/index.html>

.....

◆第31回日本小児整形外科学会学術集会◆

会 期：2020年12月3日(木)～5日(土)
会 場：愛知県産業労働センター(ウインクあいち)(オンライン開催)
会 長：服部 義(あいち小児保健医療総合センター・センター長)
詳 細：<https://site2.convention.co.jp/jpoa31/>

.....

◆第38回中部日本手外科研究会◆

会 期：2021年1月30日(土)
会 場：ウインクあいち(愛知県産業労働センター)
会 長：関谷 勇人(JA愛知厚生連海南病院 副院長)
詳 細：<https://site2.convention.co.jp/cjssh38/>

.....

◆第38回東日本手外科研究会◆

会 期：2021年1月30日(土)
会 場：栃木県総合文化センター
会 長：長田 伝重(獨協医科大学 日光医療センター副院長 整形外科 主任教授)
詳 細：<http://www.procomu.jp/ejssh2021/>

.....

◆第42回九州手外科研究会◆

会 期：2021年2月6日(土)
会 場：鹿児島県医師会館
会 長：有島 善也(恒心会おぐら病院 整形外科部長)

.....

◆第33回日本肘関節学会学術集会◆

会 期：2021年2月12日(金)～13日(土)
会 場：グランキューブ大阪
会 長：島田 幸造(JCHO大阪病院)
詳 細：<https://convention.jtbcom.co.jp/elbow2021/>

.....

◆第64回日本形成外科学会総会・学術集会◆

会 期：2021年4月14日(水)～16日(金)
会 場：ホテル椿山荘東京
会 長：朝戸 裕貴(獨協医科大学 形成外科)
詳 細：準備中

.....

◆第33回日本ハンドセラピィ学会学術集会◆

会 期：2021年4月24日(土)～25日(日)
会 場：長崎ブリックホール
会 長：野中 信宏(愛野記念病院 手外科センター)
詳 細：準備中

.....

◆第94回日本整形外科学会学術総会◆

会 期：2021年5月20日(木)～23日(日)
会 場：東京国際フォーラム・JPタワーホール&カンファレンス
会 長：土屋 弘行(金沢大学大学院整形外科学講座 教授)
詳 細：<http://www.joa2021.jp/>

.....

◆第13回日本手関節外科ワークショップ◆

会 期：2021年9月25日(土)
会 場：つくば国際会議場
会 長：田中 利和(キッコーマン総合病院)
詳 細：<https://www.jsw2020.com/>

(2020年8月現在の情報です。詳細・開催形態等は各学会にお問い合わせください。)

編集後記

今年の2月に新型コロナウイルスCOVID-19感染患者が報告されて以来、コロナの波は日本中を飲み込んでしまいました。累計患者は6万5千人を超え(8月28日現在)、1日の新規患者数は1000人弱で推移しています。東京オリンピックは延期され、プロスポーツやコンサートなどのイベントも中止や延期を余儀なくされました。4月23、24日に開催予定であった第63回日本手外科学会も、残念ながらオンラインでの開催となりました。しかし、坪川会長をはじめとした関係の方々のご尽力により、6月25日に開催されたオンライン学術集会は8月17日に無事閉幕を迎えました。

2年ごとの理事会の改変に合わせて発行される号外ですが、今回は平田新理事長はじめ新理事が紹介されています。平田新理事長のご挨拶では、委員会の再構築や若手支援など大胆な改革案が披露され、毅然とした決意が伝わってきます。会員のみなさまには、このご挨拶を今一度熟読し日本手外科学会の今後の進むべき道について再確認していただければと思います。また、長きにわたり日本手外科学会を牽引されてこられた三浦隆行先生、平澤泰介先生、原徹也先生のご逝去が報告されています。謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

コロナ禍は収束のめどはいまだにたっておらず、マスク着用や外出自粛など個々人の感染対策は今後しばらく必要になると思われます。会員の皆様には、くれぐれもご自愛のほどお願い申し上げます。

(文責：金谷耕平)

広報・渉外委員会

(担当理事：古川洋志，委員長：岸陽子)

委員：金谷耕平，佐藤光太郎，寺本憲市郎，中川夏子，原友紀)